

「活かす」ための薬剤感受性検査と耐性菌検査法

◎上地 幸平¹⁾

琉球大学病院 検査・輸血部¹⁾

微生物検査結果を臨床に活かすために、我々、「臨床」微生物検査技師は日々どう考動すべきか。薬剤感受性検査および耐性菌検査は感染症診療および感染制御において重要であるが、これらの結果を得るには時間を要する。そこで我々は正確な検査結果を適切なタイミングで、迅速に臨床に届ける工夫が求められている。特に、検査結果の報告方法については一考する必要がある。例えば感染症医には結果を伝えるだけでよくても、感染症の知識の少ない医療従事者に対しては、結果をわかりやすく解釈して伝える必要がある。伝える相手に応じた工夫が必要である。また、近年着目されているセレクトィブ/カスケードレポートはあえて情報量を絞ることで使用する抗菌薬を誘導することができるため今後は必要な報告方法の一つであると考え。

薬剤感受性検査および耐性菌検査の根幹となるのは CLSI や EUCAST のガイドラインであり、毎年更新される CLSI M100 シリーズなどはその変更点をしっかりと把握しておく必要がある。特に、近年ではブドウ球菌属のオキサシリンやセフォキシチン等、菌種に応じた判定基準が新たに設定されている。また、2018年に EUCAST から提唱された血液培養の迅速薬剤感受性検査法である rapid antimicrobial susceptibility testing (RAST) は臨床的有用性が高い。耐性菌検査法については日本臨床微生物学会から発刊されている耐性菌検査法ガイドなども参考となるが、日常検査では耐性菌の確認試験の対象となる菌株をどのようにスクリーニングするかが重要であり、迅速かつ正確な結果報告には様々な工夫が必要である。日常検査では基本に沿った検査を実施する必要があるのは言うまでもないが、近年新たに報告されている検査技術や各施設における迅速報告のための工夫などの情報を常に入手できる環境を整えることも重要である。本発表では薬剤感受性検査および耐性菌検査を臨床に活かすための知識や検査技術、日常検査時における工夫について紹介し、皆様と共有・ディスカッションできれば幸いである。